

「おばあちゃんが力をくれた」

天国からの応援 砂子田が先制打

12日、全国高校野球選手権で初戦を突破した八戸学院光星。宮城県出身の中堅手砂子田陽士(17)は夏の県大会期間中の7月19日、祖母永野頼子さん(享年84)を病気で亡くした。絶対に甲子園に行く」と頼子さんと交わした約束を果たし、大舞台へ挑んだ砂子田。五回に先制点となる2点適時打を放つ活躍を見せ、亡き祖母に勝利を届けた。「野球を楽しんでる姿を見ることができたかな」と試

合後、満面の笑みを見せた。

◇ (棟方好華)

砂子田の両親は共働きのため、学校帰りはよく頼子さんの家へ行った。「食べたいものを急に伝えても必ず作ってくれた」と、好物のハンバーグやカレーライスを頻繁にリクエスト。頼子さんの味が大好きだった。

八学光星への進学を伝える日は「一人で洗濯できるのか」と誰よりも寮生活を心配し、「お母さんに言えないことがあったら、いつでもおばあちゃんに相談してきてね」と笑顔で送り出してくれた。

20年近く闘病を続けていた頼子さんは、入院を繰り返す生活を送っていた。それでも体の調子が良い時は試合に来てくれたとい

い、砂子田はそれがうれしかった。夏の県大会前に仙台育英と行った練習試合にも駆けつけ、スタンドから応援してくれた。その日は直接話することができなかつたが、夜に頼子さんから電話がかかってきた。「具合が悪くて見に行けないと思うけど、甲子園に出たらテレビの前で応援するからね」。砂子田は「絶対に甲子園に行くから、テレビで見ているな」と伝えた。これが最後の会話となった。

夏の県大会2回戦を翌日に控えた7月19日夜、母から「おばあちゃん、もう駄目みたい」と突然、電話で告げられた。母に電話をつ

ないでもらい、病室にいる頼子さんに「おばあちゃん、ありがと」と伝え続けることしかできなかった。しかし、電話の先から聞こえてきたのは大好きだった頼子さんの声ではなく、死亡時刻を告げる医師の声。今までの思い出を振り返ると、涙があふれて止まらなかった。だが一落ち込んでいたら、おばあちゃんはずっと怒るはず」。気持ちを切り替えて試合に臨み、約束していた甲子園への切符をつかみ取った。

頼子さんが亡くなってすぐ、スマートフォン待ち受け画面を、帰宅時に撮影した頼子さんとの2ショット写真に変えた。「力をくれた」と画面を見てから臨んだ12日の甲子園初戦。0-0で迎えた五回1死2、三塁の好機では「おばあちゃん見ててな。頼むぞ」と打席に入った。変化球を中前へ運んだ2点適時打は、誰よりも甲子園出場を心待ちにしていた頼子さんにささげる一打となった。

試合後「力をくれたと思う」と砂子田。頼子さんとの約束を果たし、充実感を感じさせた。